

確かな学士力育成のための教育方法に関する実践的研究 —アクティブ・ラーニングの教育方法を取り入れた 大学の授業実践—

菊池真也

岐阜女子大学 文化創造学部
(2015年11月1日受理)

A Practical Study on using Active Learning to Assure the Cultivation of Undergraduate's Skills

Faculty of Cultural Development,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

KIKUCHI Shinya

(Received November, 1, 2015)

要 旨

近年大学教育において、確かな学士力育成のために、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育が求められている。学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的な学修（アクティブ・ラーニング）への転換が求められているのである。そこで、本研究では、3年次の初等教科教育法（社会）において、活動の目的や方法を明確にした上でアクティブ・ラーニングの教育方法を試みた。その結果、「授業のポイントを明確に把握した上で実際に授業を体験すること（模擬授業）」や「体験した授業について視点を明確にして学生同士で討議すること（授業研究会）」が学生の学修意欲や学修理解を高めるのに有効であることが明らかになった。

<キーワード> アクティブ・ラーニング, 活動の目的の明確化, 学修意欲や学修理解

1. はじめに

平成24年8月28日付の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」において、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められている¹⁾。従来のような知識注入の授業から、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・

ラーニング）への転換が必要とされているのである。この中で、学生は主体的な学修の体験を重ねて、生涯学び続ける力を修得していき、これからの社会に貢献できる力を身に付けていくことができるのである。

また、平成26年11月20日付の文部科学省の中央教育審議会への諮問「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」においても、新しい時代に必要となる資質・

能力を育成するために課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（アクティブ・ラーニング）の必要性が述べられている²⁾。こうした学習・指導方法は、知識・技能を定着させる上でも、子ども達の学習意欲を高める上でも効果的であると考えられる。従って、これからの厳しい時代を生き抜くためには、今まで以上に児童・生徒・学生の主体的な学習（学修）を促す具体的な教育の在り方を考えていくことが重要なのである。

そこで、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めるために、3年次の初等教科教育法(社会)において、アクティブ・ラーニングの教育方法を試みて研究を行った。

2. 大学でのアクティブ・ラーニングの実践

大学の初年次教育において、教養教育「日本史と社会科」の授業実践でグループディスカッションやグループワーク等のアクティブ・ラーニングの教育方法を試み、学生の学修意欲を高めることが明らかになった³⁾。また、2年次の「社会基礎」の授業実践で、自分の郷土にある地域素材を教材化する活動(表1)や地域教材発表会などのアクティブ・ラーニングの教育方法を試み、教材開発の意義や楽しさを理解することができた⁴⁾。

そこで、今回は、3年次の初等教科教育法(社会)において、現場教師の実践から学ぶ活動、指導案を作成する活動、グループ学修(指導案・模擬授業の準備等)、模擬授業、授業研究会などの多様な活動を位置付け、アクティブ・ラーニングの教育方法を試みた。ただ、アクティブな要素を盛り込んだ活動を位置付けただけでは、学生の学修意欲は高まっても、本講義の到達目標が達成できない

表1 学生の試みた地域素材の教材化

	地域素材の教材化の内容	学年
A	各務原にんじんを支える農家(各務原市)	3年
B	民家園が伝える昔の暮らし(福井県)	3年
C	道願さんの里芋づくり(福井県)	3年
D	クラウンメロン農家の仕事(静岡県)	3年
E	古くから続く高山祭り(高山市)	3年
F	富有柿農家の仕事(本巣市)	3年
G	長良西を水害から守る(岐阜市)	4年
H	東部クリーンセンター(岐阜市)	4年
I	碧南市のごみの分別(碧南市)	4年
J	人と防災未来センター(兵庫県)	5年
K	水産業が盛んな静岡県(焼津市)	5年
L	水と戦ってきた人々(大垣市)	5年
M	全国統一を進めた3大武将(愛知県)	6年
N	長く続いた戦争と沖縄戦(沖縄県)	6年

場合もあると考え、表2のように活動の目的と方法を明確にした上で、授業実践を行った。

本稿では、本講義の到達目標達成に効果のあった④グループごとに模擬授業を行う。(グループ・ワークを通して授業の進め方を体感する)と⑤授業研究会(学生間のディスカッションを通してよりよい授業の在り方を学ぶ)を中心に述べる。

(1) 模擬授業の実践(グループ・ワーク)

①社会科授業のポイントの明確化

模擬授業を行うには、社会科授業のポイントを把握した上で指導案を作成することが大切であると考え、現場教師の実践(授業のDVD視聴等)から次のことを学んだ。そして、ポイント達成のためにどんな資料を作成・提示するかが重要であることを捉えることができた。

<社会科学習指導のポイント>
・子どもの疑問を学習課題につなげる。

- ・多様な考えを出し合い追求を深める。
- ・自分の地域にもあったことを実感させる。

表2 アクティブ・ラーニングの活動目的

取り入れた教育方法 アクティブ・ラーニング	◎活動目的 ○活動方法
①教師の実践から学ぶ活動	◎指導案作成の仕方や社会科の指導過程がわかる。 ○社会科授業のDVDを視聴する。
②社会科の指導案を作成する	◎自分が行う授業の一時間の構想を明確にできる。 ○学習指導のポイントをもとに指導案を作成する。
③グループで話し合っ一つの指導案にまとめる。(グループディスカッション)	◎仲間の指導案のよさから学び自分に生かすことができる。 ○個々の指導案を交流し合い、よりよい指導案をグループで生み出す。
④グループごとに模擬授業を行う。(全体の前で授業実践・グループワーク)	◎作成した指導案をもとに社会科の授業の進め方が体感できる。 ○教師役、子ども役になりグループごとに授業実践。
⑤授業研究会(全体交流会・ディスカッション)	◎実践した授業のよさ、改善点を話し合う中で、よりよい授業の在り方を学ぶ。 ○学習ポイントを明確にした模擬授業チェック表をもとに話し合う。

②グループで一つの指導案を作成

より主体的に模擬授業を行うためには、個々の学生が作成した指導案をもとに、グループで話し合っ一つの指導案を生み出す活動が有効であると考えた。学生は、小グループ(7名)で、社会科授業のポイントをもとに積極的に意見やアイデアを出し合い、一つの指導案を生み出すことができた。

③模擬授業の実践

受講者35名を5グループに分け、教師役と

子ども役になり、教師役は授業の細案を立案し、その他の学生は資料づくりを行った。その後、授業リハーサルを行い、模擬授業に臨んだ。

1グループずつ全体の前で模擬授業を行い、その後授業研究会を行うというスタイルで5回に分けて行った。この方法のよさは、1回行うごとに前のグループの改善点を生かして授業を行うため、段々とよりよい授業が生み出される結果となった。ここでは、5回目の模擬授業(4グループ)の実践をもとに報告する。

次頁の表3は、4グループの指導案である。



図1 実物大の大仏の手の提示

授業者のK子は、4グループの話し合いをもとに、今までの授業研究会で出された改善点を生かして主体的に取り組むことができた。

<つかむ段階>子どもの疑問を課題につなげる

今までのグループの実践で「大仏の手」の

表3 学生の作成した社会科学学習指導案～6年単元「聖武天皇と奈良の大仏」～

○本時の目標

聖武天皇が奈良の大仏を造ったのは、仏教の力で社会の不安をしずめ、国を治めようと願ったからであることがわかる。

○本時の展開

過程	学 習 活 動	資料提示	指導上の留意点・評価・評価基準
つ か む	1 実物大の大仏の手の大きさとその手いっぱいにつけられた手形を見て、大仏の大きさを実感として捉える。	・実物大の大仏の手に、手形を付けた資料	・資料から、本当にこんなに大きいんだという驚きを持ち、疑問から学習課題につなげるようにする。
	【課題】 どうして聖武天皇はこんなに大きな奈良の大仏を造ったのだろう。		
ふ か め る	2 課題の予想を立てる。 ・みんなが見えるように大仏を造った。 ・自分の力を見せつけたかった。 3 資料から個人追求と全体交流 ・詔の「みんなを救う」にあるように疫病で苦しむ人を仏教の力で救おうとした。 ・聖武天皇は自分がどうにかしなくてはという強い思いをもっていた。そして、みんなの力を集めて造ればたくさんの人を救うことができると思っていた。その思いが大きな大仏に込められている。	・地震、疫病年表 ・聖武天皇の「責めは我ひとり」にあり ・聖武天皇の詔	・予想の段階では、児童が自由な発想で考えが持てるよう促す。 ・流れが分かるような資料提示を工夫する。 ・聖武天皇の人柄や考えにも注目させる。 評価規準<思考・判断・表現> ・当時の人々や聖武天皇の思い・願いを3つの資料を関連づけて読み取っている。
ま と め る	4 身近な地域資料（岐阜大仏）の提示 ・この地域にある岐阜大仏も人々の平和を願って造られたんだ。 5 学習のまとめ 聖武天皇が奈良の大仏を造ったのは、仏教の力で社会の不安をしずめ、国を治めたい、みんなの力で大きな大仏を造ることで、多くの人を救いたいと願っていたことが分かった。 6 本時の授業のまとめの資料（映像資料）を見る。	・岐阜大仏の写真 ・国分寺の分布図、美濃国分寺の写真 ・NHK「歴史にドッキリ～大仏はなぜ造られた～」	・岐阜大仏や国分寺を提示して身近な地域でも同じ願いで造られたものがあることを実感させる。 ・板書で取り上げたポイントとなるキーワードを入れてまとめられるよう促す。 ・本時の授業のまとめとして映像資料を見せ、自分達が追求してきたこととつなげることで聖武天皇の願いに迫る。

提示から大きさを実感させ、課題につなげる授業はあったが、一目見ただけで「大きな大仏」と実感できる工夫が十分でなかった。そこで、K子は大仏の手の中に150人分の手形を入れて提示することを提案し、より効果的な資料づくりに取り組んだ。図1は、K子が実際に提示した資料である。これを見た瞬間、模擬授業を見ていた学生は、実際の大きさと手形150人分という事実から大仏の大きさを実感し、「なぜこんなに大きな大仏を造ったのか」という疑問を課題につなげることができた。

<深める段階>多様な考えを出し合い追求する

K子は、今までのグループの追求が関連性のない資料の提示であり深まらなかったという反省を生かして、地震・疫病年表、「責めは我ひとりにあり」という聖武天皇の言葉、大仏造営の詔の3つの資料を関連づけて追求を深めようと考えた。図2の写真にあるように「みんなの力を集めて仏教の力で社会の不安をはずめたい」という聖武天皇の願いに迫る授業展開になった。

<深める段階>地域の資料でさらに追求する

K子は、図3のように、岐阜大仏の映像資料を用いて、時代は違うが不安な世の中を仏教の力ではずめようとしたことを身近な資料を提示して実感として捉えることができるような工夫を行った。

<まとめる段階>自分なりのまとめをする

K子はキーワードの「聖武天皇」「仏教」「不安」を使って自分なりのまとめをすることやNHKの映像資料を使って本時学習したことを視覚的に捉える工夫を行い、聖武天皇の願いに迫ることができた。

このように、模擬授業の実践を通して、社会科の授業のポイントを明確に把握した上で、グループで話し合っ

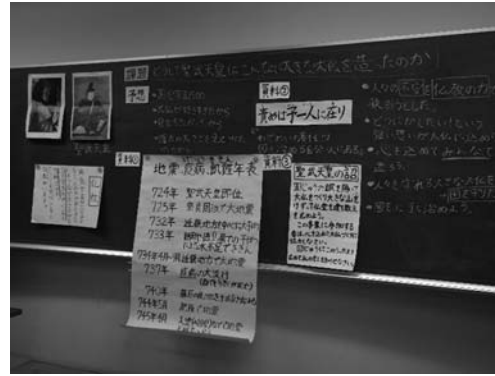


図2 多様な追求で聖武天皇の願いに迫る



図3 地域の資料（岐阜大仏）の提示

成し、順に模擬授業を行うことは、改善点を次に生かしよりよい授業を行う上で有効であることが分かった。4グループ以外でも様々な工夫した資料があったが、図4は、つかむ段階で提示した大仏の大きさを同じ長さのひもを用いて体感させて課題化した例である。学生がひもをもち、教室の前から後ろまでで足りず、廊下まで出た時に、「こんなにも大きい」と驚きの声があがり、大仏の大きさを実感することができた。図1の実物大の大仏の手の提示と同様に、課題化では大仏の大きさを実感させ、子どもの疑問や驚きを課題につなげていくことが大切であると分かった。



図4 大仏の大きさをひもの長さで提示

(2) 授業研究会 (全体ディスカッション)

実践した授業のよさや改善点を話し合う中でよりよい授業の在り方を学ぶことを目的として授業研究会(図5)を行った。体験した授業について視点を明確にして学生同士で討議するために、表4「模擬授業チェック表」を作成した。これは、模擬授業を見ながら、社会科の学習指導のポイントから見た授業のよさや改善点をメモし、それをもとに授業研究会で討議できるようにするためのものである。



図5 授業研究会の様子

表5は授業研究会で出された意見であるが、社会科の授業のポイントを中心に様々な考えが出され、学生の主体的な学修姿勢が感じられた。特に、「せっかく大仏の大きさが

表4 模擬授業チェック表

模擬授業を受けて					
学籍番号:		氏名:			
授業者:		児童役	審議者役		
1	声の大きさ	(4)	3	2	1
2	声の明瞭さ	(4)	3	2	1
3	笑顔	(4)	3	2	1
4	堂々とした態度	(4)	3	2	1
5	授業のポイント1 児童が疑問をもつ資料の提示の工夫	(4)	3	2	1
6	授業のポイント2 多様な追求ができる資料提示の工夫	(4)	3	2	1
7	授業のポイント3 児童が興味をもつ地域の資料提示の工夫	(4)	3	2	1
8	指導案の書きぶり	(4)	3	2	1
9	気が付いたよさ	授業のよさや改善点をメモし、それを授業研究会で討議できるようにするためのものである。			
10	気が付いた改善点	大仏の大きさをひもの長さで提示して、児童が興味をもつ地域の資料提示の工夫。			

表5 授業研究会で出された主な意見

- <よい点>
- ・実物大の大仏の手と手形150人分で大きさを実感して課題につなげることができた。
 - ・大仏の手のポーズに着目して左手は不安を除く、右手は願いを叶えることを初めて知った。
 - ・岐阜大仏と江戸時代地震年表を提示して奈良の大仏との共通点を考えたところがよかった。
- <改善点>
- ・大仏の大きさを実感して課題化したのに学習のまとめが課題とつながっていなかった。
 - ・鼻の穴の提示で大仏の大きさが実感できたが模型だったのでぐりぬけをするとうよかった。
 - ・天然痘や飢饉の資料が文章資料だったが絵を提示して不安や苦しさを体感できるとよかった。

実感できたのに課題とまとめが繋がっていない」という意見は本時のねらいを達成する上で鋭い発言であり、研究会が深まるきっかけとなった。この研究会では、「大きい」ことの意味が「大きいほど願いが叶う」「みんなの力で大仏を造ることに意味がある」等の意見が出され学修理解の高まりにつながっ

た。

このように、授業研究会が学修意欲や学修理解の高まりにつながったのは、模擬授業チェック表にメモしたことをもとに視点（社会科の授業のポイント）を明確にして学生同士で討議することができたからであると考える。

3. アクティブ・ラーニングへの学生の評価

このように、3年次の初等教科教育法（社会）において、活動の目的と方法を明確にした上でアクティブ・ラーニングの教育方法を試みた。この実践に対して学生はどのように評価しているかアンケート調査を実施し明らかにしようと考えた。評価を学修理解面（学修内容の理解が高まったか）と学修意欲面（学修への意欲が高まったか）の2面から4段階尺度（4：とても高まった 3：まあ高まった 2：あまり高まらなかった 1：全く高まらなかった）で調査した。調査人数は21名である。本講義で実施したアクティブ・ラーニングのうち、本稿で述べてきた2項目（模擬授業、授業研究会）についての評価は次の通りであった。

この結果から、次のことが明らかになった。

- ・模擬授業、授業研究会共にどの学生も学修内容の理解への高まりがあったと感じている。
- ・模擬授業より授業研究会の方が学修内容の理解度が高いと感じている学生がやや多い。
- ・模擬授業、授業研究会共にどの学生も学修意欲の高まりがあったと感じている。

総じて、本講義で実施したアクティブ・ラーニングは、学生の学修内容の理解や学修意欲の高まりにつながることがわかった。また、図8の調査結果から次の点が明らかに

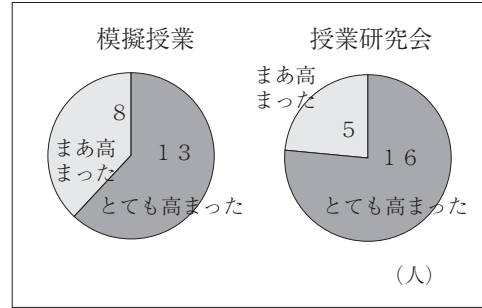


図6 模擬授業、授業研究会での学修内容理解度

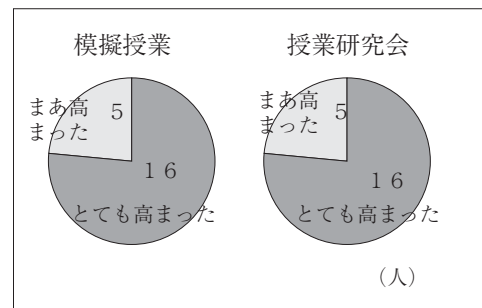


図7 模擬授業、授業研究会での学修意欲

なった。

- ・本講義の到達目標の一つである「社会科授業のポイントが理解できる」については、ほとんどの学生に高まりがあったと感じている。

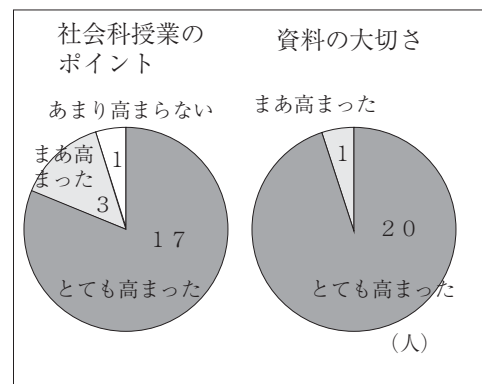


図8 本講義を受けて高まったこと

・「社会科の資料の大切さ」については、模擬授業や授業研究会を通して、どの学生も実感として捉えていることがわかる。

4. おわりに

表6 模擬授業を終えて (学生の感想)

私はあまり社会が得意ではなかったが、この模擬授業を通して社会の楽しさを実感することができた。同じ単元で皆同じ目標でやっているにもかかわらず、準備する資料や授業内容の構成によってそれぞれのグループで違いや特色があって驚いた。教材観や児童観の小さな違いから指導観の多様性が生まれることを学んだ。私は最後の模擬授業だったので、前の4つの授業のよさや改善点を自分に生かせるように取り組めたこと、先生が言われた「資料が命」「実感を伴った理解」の意味がよくわかったことが講義での大きな収穫であったと思う。(後略)

今回は3年次の初等教科教育法(社会)において活動と方法を明確にしてアクティブ・ラーニングの教育方法を試みた。表6は本講義終了後のK子(模擬授業実践者)の感想である。

今回の授業実践や学生の評価を通して明らかになったことは、次の点である。

・ただ単に、アクティブな要素を盛り込んだ活動を行うだけでなく、活動の目的や方法を明確にした上でアクティブ・ラーニングの教育方法を実践することが大切である。

・本講義では、様々なアクティブ・ラーニン

グを実践したが、その中でも模擬授業と授業研究会が学生の学修内容の理解や学修意欲を高めるのに有効である。

・模擬授業の実践は、個々が社会科授業のポイントを明確に把握した上で指導案を作成し、グループで意見を出し合って一つの指導案にまとめ実践することが有効である。

・体験した授業について視点を明確にして学生同士で討議すること(授業研究会)は、授業のポイントを理解し、資料の大切さを実感する上でも有効である。

今後も、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めるために、学生の能動的学修(アクティブ・ラーニング)の効果的な在り方についてさらに研究を深めていきたい。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省中央教育審議会(2012)新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)
- 2) 文部科学省中央教育審議会(2014)初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について(諮問)
- 3) 齋藤陽子・菊池真也・吉村希至(2014)「大学1年次学生へのアクティブ・ラーニングに関する実践的研究」岐阜女子大学文化情報研, 16(5), 39-44.
- 4) 菊池真也(2015)「地域素材の教材科の意義と方法」岐阜女子大学初等教育学研究報告, 4, 7-12.